京都帝國大學經濟學會

# 經濟論叢

第十一卷　第六號


**論說**

地租と地方團體との關係……法學博士　神戸正雄

植民地の財政政策に就きて(三)……法學博士　山本美越乃

地代課稅主義土地改良論者……法學博士　河田嗣郎

生計調査を論ず……法學士　汐見三郎

價値論上のリカアドとマルクス(三・完)……經濟學士　堀經夫

**時事問題**

目下の卸賣相場と小賣相場……法學博士　戸田海市

**雜錄**

英國現代の經濟學者と社會主義……經濟學士　三田村一郎

經濟地理學研究に對するグルーベル博士の見解……經濟學士　黑正巖

竹越氏の「日本經濟史」に就て……法學士　本庄榮治郎

石澤氏の「本邦銀行發達史」を讀む……法學士　大森研造

**附錄**……本誌第十一卷總目錄……

# 雜錄

# 英國現代の經濟學者と社會主義

三田村一郎

社會主義が今日の社會運動勞働運動を支配する一の大なる勢力なる事は社會主義を可とする者と否とする者とを問はず均しく認めざるを得ない所である。今此社會主義に對し、經濟學の祖國たる英國現代の經濟學者が如何なる態度をとりつつあるかは頗る興味ある問題なる可きを思ひ、エドウイン・キャナン博士の見る所を紹介する事とした。原文は Theories of Production and Distribution (1917) 第九章第五節(Usefulness of the existing theories) の終りの部分であるが余は內容の上より見て獨立の一文として前記の題名を附した次第である。尙 解を防ぐ爲め次の諸點を明にして置きたいと思ふ。

(1) 原文は一九〇三年の第二版に於て新に附加へられたもので一九一七年の第三版に於ても何ら變更訂正された點が無い。而して余は此第三版によつたのであるから、所謂現代とは一九一七年當時のことである。

(2) 次に余が題名中英國現代の經濟學者と限定せるは前掲書四〇四頁後段より推考したものであるが、そが具體的に如何なる人々を指すやにつきてはキャナンは毫も之に言及し居らざるを以て此所では單に抽象的にキャナンの見たる一般の英國現代經濟學者と解するを以て滿足しなければならぬ。ただ然しキャナンが其一人たる事丈は疑を容れるの餘地が無い隨つて氏が執筆當時、社會主義に對し如何なる態度を持せしやは、本文によつて略之を窺ひ知る事が出來るであらう。

(3) 余は成る可く原文に忠實ならん事を努めたが、然し譯文の前後の關係を明にし又は滑にするが爲めに筆を加へ又內容に關し註を附した所も少くない。これらの箇所は一々(　)を附して責任を明にした。尙余は社會思想史上の興味から、舊派經濟學の大成者として知られ而も同時に其自叙傳[2]に於て自ら社會主義者なる事を表明せる、ジエ・エス・ミルの社會主義に對する態度を二三の點に就きて附記し、似て現代英國經濟學者の夫れとの比較を試みた。但しジエ・エス・ミルの社會主義觀については他日稿を改めて之を論ずるの機會があるであらう。

* * * * * * * *

## 一

今日の經濟學者の一般社會主義に對する反對の程度が古典學派の先輩達よりも遙に少いといふ事は事實である(註一)。(然らば何故にかゝる差異を見るに至りしやといふに)此變化は大部分は

1) 一、二、等の小分は便宜に出づ
2) J. S. Mill : Autobiography. p. 132 (popular edition)

效用測定の方法に於ける變化に歸因するものである（註二）。以前には單に「感情的」な又は非經濟的な根據に基ゐてのみ推擧する事が出來た多くの事物が（今や）限界效用說によつて經濟的なりとせられて居る。英國に於ける社會主義の抱負がマルクスの諸教義から多くの强味を得た事がありとしても、其時代は（既に）過去に屬し、今やそは富の分配を一層公平ならしめる事が望ましいといふ（社會）一般の信念に主として依存するものである。（然るに）現代の經濟學は上述の信念の正當なる事を示してゐる。（卽ち各人の）必要が均等なりと假定せば、一定量の生產物又は所得は其分配が均等になればなる程「益々多くの效用を發揮するもの」なる事は正に現代經濟學の敎ふる所である。現在に於ける分配の不平等は決して（各人の）必要に比例するものなりと言ふ事は出來ない。然るに社會主義及び共產主義の抱負の中に於て求められてゐる平等は常に――時としては恐らく多少不鮮明ではあるが――（各人の）必要の差異によつて緩和されるものと解せられてをる。

仍つて分配のみを切離して考ふる限りに於ては今日の經濟學者は社會主義の抱負に大に同情する者である。然し分配及び生產の相互の作用及び反作用を學んだ以上我々（經濟學者）は分配上の諸變更のみを引離し、而してそが生產に及ぼす影響如何を無視して、これらの變更を推擧する事は出來ない。實に現代の經濟學者は經濟的利己心の刺戟なくしては、如何なる將來に於ても勤勉を充分に刺戟し得ざるものであるといふ舊來の見解を採用す可く餘儀なくされる者ではない（註三）。彼（我々現代の經濟學者――譯者註以下準之）は事實此世に於ける最も困難な且つ最も良い勞働の多くが經濟的報酬を目的とせずして行はれてをる事を知つてゐる。そして彼は人民全體の勤勉に對し、（經濟的報酬と）同樣に有效なる諸動機を供へる如き諸制度を發達進化せしむるの可能を考へ得る者である。人間性は當に同一で（變化しないもので）あるから上述の如き事は、何時になつても不可能であるに

文中括弧内は譯者の記入せるもの

相違ないといふ主張があるが、吾人にして現時の狀態に於ける如何に多くの物がウイリアム・ザ・コンカラ(William the Conqueror)や女王ボウアヂシア(Queen Boadicea)の心には絶對に不可能なる事と思はれたでもあらうといふ事を顧るに於ては、此の如き主張は(彼に對し)何らの痛痒をも與ふるもので無い、又彼はマルザスの反共産主義的議論を社會主義の抱負に對する致命的議論なりと認める事を餘儀なくされる者でもない(註四)。(成る程)人口の增加が物理的に可能なる最大の速度を以て永く繼續する時は必ずや何等かの慘害を主ずるに至るものなる事は確に眞實であるが、[1]然し最も徹底的なる共産主義でも、それが上述の如き(人口)增加を助成し若くは許すであらうと考ふ可き根據は毫も存しない現在に於てすらも出産率が非經濟的なる諸原因によつて可なりの程度まで抑壓されてゐる事は事實である。而してこれ等の諸原因が一の共産主義的組織の下に於て强大となり、遂には略必要なる力を有するに至るかもしれぬといふ事は大に有り得べき所である。「略ぼ」といふ事が必要なるものゝ全部である、蓋し最も熱心な個人主義者でも自己の(個人主義的)組織が、それ(略ぼといふ程度——譯者註)以上の保護をしてゐると主張する事は困難なやうに思はれる。(註五)

(註一)　所謂「古典學派の先輩達」の中にはマルザス及びリカアドが含まれてゐる事は前者が多數人の貧困を自然的法則(人口の原理)に基くとし[2]資本主義的經濟組織を絶對不變の組織となす者なる事及び後者が資本の增加を以て社會經濟上最大重要の條件とし利潤の爲めの勞賃の犧牲を肯定し、「地主の爲には地代の正當を論證し」貧困てふ人間の運命が勞働者階級のみの負擔に歸す可き理を論じて、[3]一切の社會主義的理想に對抗せんとしたるもの」なる事より見て明白である。然しジエ・エス・ミルは所謂「古典學派の先輩達」の中に入れらるゝ可きでは無い。蓋しミルは積極的に自ら一の社會主義者なる旨を表明し、[4][5]消極的には氏を以て社會主義に反對する者なりとの批評に對して屢々辯解を試みてゐる者であるからである。余の見る所によればミルは所謂「現代の經濟學者」よりも遙に大なる同情を社會主義に對して有せるものといはねばならぬ。

(註二)　效用測定の方法の變化についてはキヤナン前揭書(pp. 394; 396 *; 397)參照。其他此點に關し好參考となる著書論文左の如し。Cannan; Wealth pp. 108-11; Gide &

1) 以上 Cannan : ditto. p. 405.
2) Malthus : An Essay on the Principle of Population. p. 317 參照 (Ward and Lock Co'sed.)
3) 河上博士：近世經濟思想史論百三十頁
4) 前出 Autobiography. p. 132
5) Letters of J. S. Mill. (edited by Hugh Elliot) Vol. I. pp. 138; 169; 193: Vol. II p. 110 etc.

Rist. History of Economic Doctrines (Eng. tr.) pp. 521-3; Jevons, Theory of Political Economy (1871; 2nd ed. rivised, 1879), Chs. 3 and 4; Appendix by Ashley J. S. Mill. Principles. (Ashley's ed.) P. 995, etc.

**(註三)** 經濟的利己心の刺戟なくとも將來勤勉を誘致する事が出來ると考ふる點についてはミルは現代經濟學者と同じである。卽ちミルは利己心[1]が現存の社會狀態の一般的特質を成す事を認め、根深き利己心に對し私益の誘因を直ちに除き去らんとする如きは惡な事であると說きつゝも、一方に於て、[2]今日公共の福祉に關する利害觀念が一般人に於て其行爲の原動力として頗る薄弱なるはその然らざるを得ざるが故では無くして精神が日夜單に個人的利益となるやうな事物の上に存在せるが爲めに公益に思ひを致すやうにならされてをらぬからである」となし、從來のやうに單に狹い利己的目的の爲めではなく一般の又は公共的社會的目的の爲めに勞働し協力するの能力は人類に常に存したのであつて今日と雖も消滅してをるのではなく將來も決して消滅しさうにはない。從つて教育、慣習、情緒の敎化等によつて普通人も尙祖國の爲めに戰ふと同樣に自ら進んで祖國の爲めに採掘し又は機織るに至るであらうと信じた。彼も亦ミルと共に、[3]人は個人的排他的利益の爲めよりも更に一般的な目的の爲めには働き得ざるものなりとは信ぜられない」一人である。

**(註四)** マルザスの反共產主義的議論とは惟ふに氏が貧困を救濟せんには人口の增加を制限するを要し、人口の增加を制限するには各個人の自制を必要とし、更に「かゝる自制が十分に行はれるが爲めには、其社會に財產の私有及び相續の制が行はれ、之に依りて富の不平等なる分配狀態が維持されつゝあることを必要とする」といふ點を指すものであらう。

**(註五)** ミルは、[4]公共的感情を發達せしむるには共產主義の社會程都合の良い所は又とない」といひ又共產主義は生活を保障する結果人口過剩し食物不足のために全社會が飢餓に陷るであらうとの非難に對してはミルは「共產社會では輿論が此の如き利己的な不攝生に對しては强く反對するだらう」と言ひ其理由として人口過剩は全社會の衣食を減ずるか又は勞働の負擔を增加する事となり、社會の各個人に直接不自由を惹起する事となるが故であると述べ却つて共產社會は人口過剩の弊を防ぐの效があると辯護してゐる。

## 二

經濟學者にとつての問題は組織の問題である。（1）社會主義組織の下に於ても私有財產（制）及び自由勞働（制）の下に於けると同樣に生產を整へうるや否や（2）此組織は（資本主義組織に於けると）同樣に正確に消費者の慾望に適應するであらうか。勿論中には消費者の慾望は

1) Autobiography. p. 134
2) Autobiography. pp. 132-3.; Principles. p. 206.
3) Letters. Vol, I. p. 193. (Constantino Baer, attaché au Ministêre de l'Intérierir à Napole 宛の Mill の書簡の一節)
4) Principles. pp. 206-7.

現在に於て唯折々又偶然適應されるに止まると主張する人々がある。これらの人々は偶々出會す所の混亂の例や、浪費の例のみに心を集中しこれら(の場合)を常態なりとし、かくて事業の普通の活動狀態を以て偶然の異例に屬すと考ふる者である。大體に於て可なり良く(物資を)供給されてをる所の現代の文明世界を如實に觀察する代りに彼等は人々が右往左往に驅け廻りつつ唯折々食にありつくに過ぎないと想像してをる。結局裸で居る者は一人も無く、多くは可なり良い着物を着てゐる事を觀察する代りに、彼等は御互の襤褸着を借りたり盜むだりしてゐる所の寒さに震へる人々を想像する。(又)かなり居心地の良い幾百萬の住家が相當地域に大抵行き亘つてゐる事實を見る代りに彼等は人民全體が、じめじめした不衛生な茅屋にびつちやに詰合つてゐるものとして考へてゐる。(更に)人々が迅速に、規則正しくあらゆる種類の運輸機關によつてあちらこちらに運ばれてをる事を見る代りに、彼等は人々が過度に込合つてゐる列車や電車に乘り込まうと爭つてゐる所や、とり殘されてをるのを見る事が出來るに過ぎない。

然しこれらの觀察者は其心の目に於て何處かに故障がある現存の組織は決して完全ではないが兎も角過去及び現在に於てどの形態の政府がそれに代へ得たでもあらう所の如何なる組織よりも勝れるものなる事は健全なる眼には明白である。過去に關しては此事は殆んど凡ての人によつて容易に認められるであらう。ウエシックス(Wessex)(英の舊王國—補註—)が千三百年以前に於て一の社會主義的生産組織を有し、而も有益な結果を收め得たるならむとは何人も考へざる所である。(又)殆んど何人も大不列顛が二百年以前に或る意識的努力によつて有機的生産組織をたて得たであらうと考へる者は無い。狂信者に非ざる限りは何人も大不列顛或は大不列顛と愛蘭否英帝國、否文明世界、否(更に)全世界が今日直ちに社會主義的諸制度を建て、以て有益なる結果を收め得可しと考ふる者は無い。過去半世紀間の歷史の知識の進歩は突然な

1) 以上 Cannan : ditto, p. 406

る「革命」の古き信仰を全く陳腐に歸せしめて了つた。過去の突然なる革命と考へられた者も數世紀に亘れる漸進的諸變化の道程に於ける突出點（特に目立つた點）に過ぎざる事が確められた。かくて（現今に於ては）普通の智識及び理解力を有する者は何人と雖も最早一の「社會的革命」――私有財産（制）及び或る形の地方的政府による完全なる産業管理が之に代る事を期待する者は無い。最も熱心なる人々と雖も此の如き狀態に向つての漸進的變化を期待し得るに過ぎない（注六）

（注六）生産制度の方面より見れば今日の社會では即ち賃傭勞動制が行はれてゐるのであるがミルは勞働者の智識進歩し平等思想の普及につれ、かゝる制度は到底永く之を維持し得ずとし[1]「勞働者がよつて以て其事業を營む可き資本を共有し勞働者自身によつて選ばれ從つて又免職されう可き支配人の下に勞働する所の平等の條件に基く勞働者自身の共働組合が最後の勝利を贏ち得可く」[2]かくて成就された改造は社會的正義に最も近いものであつて社會一般の福祉に對し今日（一八五二）に於て豫見し得る最も有益な産業組織である」と書つてゐる。ミルが賃傭勞働制に代ふるに資本を共有する勞働者組合による産業自治を以てし、これやがて窮極の産業組織なりとせしは此點に關する氏の窮極の思想が社會主義特に現代の組合社會主義の根本思潮と一致するものなる事を物語るものである。然し氏は[3]「人類の思想の根本的構成に大なる變化が生ずる迄は人類の運命に於ける大改良は不可能なる事を確信し」「人類社會の改善を直に期待する如き考を以て誤れり」としたのであつて、眞の社會改造は[4]「人々殊に勞働者の智的道德的教養の進歩を前提として漸進的に實現し得可く又實現す可きものなりと考ふる者である、由是觀之ミルは現代の所謂「最も熱心なる人々」と其態度を同じうする者と云ひ得るであらう。



## 三

漸進的變化が遠き將來に於て遂に何等かの形の意識的組織を發達進化せしめ、かゝる組織が其時に於て良好の作用をなし且つ（現存の）私有財産及び自由勞働（制）に基く無意識的組織よりも一層良き作用をなすかもしれないといふ事を否定す可き材料は現代の經濟學に一つも含まれてゐない。然し經濟學者は將來が現在よりも良くなるかもしれぬといふ希望以上に此問題について何らか特定の見解を有するの必要は少しも無いやうに思はれる。漸進的進歩の觀念が認めらるゝ以上現代經濟學者は一の特定の理想に向

1) J. S. Mill. Principles of Political Economy Book IV. Chapter 7 § 6 pp (772-3) (Ashley's edition)
2) ditto. § 7 p. 792.
3) Autobiography. p. 137.
4) 參照 Autobiography. p. 132
Letters of J. S. Mill. Vol. I. pp. 167; 169
Principles. Preface to the 3rd ed. and pp. 791-2（漸進的、非革命的、進化的態度を窺ひ得）
Fortnightly Review (1879) Chapters on Socialism by Mill p. 526 etc.

ふものゝ如く思はるゝの故を以て惡い變化にても之を支持する如き事なく、又は此の如く思はれざるの故を以て善い變化をも否なりとする如き事なくして、(實際に)行はれ又は提言される各々の變化につき其善惡を考察するの自由を有する者である。かるが故に現代經濟學者は、かの變化を支持し又は反對する場合に、それ等(それらの變化)の功過(眞相)による事なくそれら(の變化)が自己の理想に向つて進むものなりや若くは之より遠ざからむとする運動なりやに關して——往々にして全然不充分なる根據に基ゐて——彼が形成せる自己の意見に從ふ(て或は變化を支持し或は之に反對せんとする所の)社會主義及び個人主義の熱狂者には共に同意せざる事の屢々存す可きは確である。[1]

1) 以上 Cannan : ditto. p. 407.